

# 謝四恩 こうして稽古が



師範をつとめる尚美学園大学剣道部の部旗には「謝四恩」と染め抜かれている (撮影=徳江正之)

に立って学校葬を取り仕切ってくれました。わたしは彼の後ろから、いつもノロノロとついていっているような状態でした。そんな彼はわたしより一年早くに八段に合格しました。一緒に受審しに行ったところ、偶然にも齋藤氏とわたしの審査相手と同じ人だったので。わたしは一次審査で落ちましたが、彼は見事に二次審査も突破。それからの一年、わたしは齋藤氏の真似をしたのです。審査前の一、二年間、齋藤氏は特練生を相手に

# できるのも皆さんのおかげです

## 座右の銘は「四恩に謝す」

一年間、わたしの戯言にお付き合いいただき、ありがとうございました。連載中、皆さんから激励の言葉をいただき、心より感謝しております。いよいよ最終回となりました。以前少しお話しした「謝四恩」の気持ちで総括したいと思います。三月下旬に大阪の清教学園中高の剣道部員の皆さんが、松風館に来訪してくれました。指導者の神谷昌宏先生に、以前「謝四恩」についてお話ししたところ、とても感銘を受けてくださり、OB・OG会に「四恩会」と名付けてくれました。また、わたしが揮毫した「謝四恩」「山々雲」という下手な書を、額にいれて道場に飾ってくださっているのも有難いことです。近くに掲げられた笹森建美先生の「妙剣」「無想剣」という書があまりに達筆なので、少々恥ずかしいのですが……。

おさらいになりますが、「謝四恩」とは、「四恩に謝す」と読みます。

「人間は一人で生きていくことはできない。多くの人の力添えで人は成長する。その御恩に対し、感謝の念を持つ」という心のあり方の教訓です。この言葉との出会いは、千葉大学第一外科教室教授であり、習志野病院院長でいらした、故綿貫重雄先生（剣道教士七段）の叙祝祝いでいただいた文鎮に刻まれてあったのが最初です。

当時のわたしには、この意味がわからず、恥を忍んでその意味を尋ねたのでした。真意を知った瞬間、「これだ」と目が覚める思いでした。それから「四恩」について辞書で調べてみました。仏教の教えの中で「すべての人間が受ける四つの恩」「人の人たる道は恩を知り、恩に報いるべき」と説いていました。

たえば、「正法念処経」には「母の恩・父の恩・如来の恩・説法師の恩」と。「大乘本生心地観経」では「父母の恩・衆生（社会）の恩・国王（国家）の恩・三宝（仏・法・僧）の恩」と、もうひとつ「父母の恩・師長（先生）の恩・国王の恩・施主の恩」と説かれています。また、山岡鉄舟先生も「修身二十則」の中で「君の御恩・父母の御恩・師の御恩・人の御恩は忘る可からず候」と記しておられます。

この四つの恩を、剣道の修練を積み身から解釈すると、「丈夫に産んでくれた父母の恩・剣道が盛んな日本という国への恩・教え導いてくれた師への恩・共に切磋琢磨してきた剣友の恩」ということになるでしょうね。そう考えると、やはり「謝四恩」は、剣道を通じて人間形成して行く上で、大切な言葉だと確信しています。

## 「我以外皆我師」を胸に今日も一本

以前もお話ししましたが、わたしは母のおかげで成田高校に進学することができたからこそ、千葉県警に採用される道が開け、そして、今があると思っっています。そういう意味でも、親への感謝は絶えることはありません。

また、多くの先生方に、剣道について、人生について教示していただきました。伊藤彰爾先生、滝口正義先生、糸賀憲一先生、馬淵好吉先生、松和芳郎先生、佐藤清英先生、和田金次先生、小森園正雄先生、岡憲次郎先生、森島健男先生……、わが師に何があっても感謝です。しかし、その側面、反面教師と言ってしまうか。「こんな先生にはなりたくないな」というのも、正直数々見てきました。

朝稽古をし、面の打ち込みに励んでいました。それなのにわたしは、それを横目で見つつ、元立ちをしていました。審査の結果が出たとき、その差など痛感しました。

八段審査に落ちたわたしは、その後毎日、齋藤氏のように打ち込みをしました。

翌年、京都へ審査を受けに行くとき、面倒見のいい彼はずっと付き添ってくれました。一次審査の発表を見てきた彼が、控え室で待つわたしに向かって「受かってたぞ！ 頑張れ！」と激励してくれたことは、二次審査に向けて大きな力になったのを、今も鮮明に覚えています。そんなふうには、わたしは常に彼を追いかけました。剣友というものがまじいような、あの意味、先輩のような感覚です。

捨て身の面でも試合に次々勝ち進んでいた彼は、剣道にせよ、仕事にせよ、「こう！」と自分が信じた道は、とことん突き進むタイプでした。わたしはそんな彼に育てられました。いつも彼の背中を追いかけました。齋藤輝男がいなければ、今のわたしはなかった。そう思い、感謝するので

## 「山々雲」……山越せば前にまた山

先日亡くなられた羽賀忠利先生の「剣道の詩」というご著書の中に、「山々雲」についての記述がありました。

「剣道は高き山をば登るごとく  
一山越せば前にまた山」

修行の道にはこれだよというのではないとの  
訓えです。

その言葉を知ったとき、「謝四恩」と出会った  
ときのようなひらめきがありましたね。生涯剣道

たえば、稽古に行っても誰も並んでもらえないような先生。自分の稽古が求められていないという事です。そうなる前に自分の剣道を見つめなおす必要があると思います。

剣道は相手あってのこと。相手を見下したような稽古をしていては、次もお願ひしたいと思われはるはずがないです。ですから、ある意味、反面教師的な先生にも学ぶところは非常に多いのです。わたしは「受けたら、迎え突きをする暇があったら、先をかけて打つのが大切だ」と、常々教えられてきました。稽古をお願いする者が安心して掛かれるように。だから、その教えを授けてくださった糸賀先生や佐藤先生との稽古では、当てることは一本もできませんでしたが、それでも積極的に打っていかれました。そして今日の岩立三郎が培われたのだと思います。

高野佐三郎先生が、ご自分の杖に「我以外皆我師」と彫刻されていたそうですが、まさにその通りだと思えますね。

## 剣友齋藤輝男がいたからこそ……

わたしにとってかけがえない剣友といえは、成田在住の齋藤輝男氏（剣道範士八段）です。

彼とわたしは成田高校の同期生で、千葉県警、そして県剣連事務局と長くご縁がありました。齋藤氏は、高校時代はインターハイ予選に先鋒で出場し全勝。最優秀選手に選ばれました。

千葉県警に入ってから、彼は早々に機動隊から声がかかり、特練生として第一線で活躍。関東管区警察大会個人戦で準優勝を果たしたほどの実力者でした。

また、事務局を任せれば率先して仕事を遂行します。馬淵先生が亡くなったときも、彼が先頭

をめざすための考え方として、大切にしたいと胸に刻みました。

たえば、わたしは佐藤清英先生に「左手の締めまりがない」とご指導いただき、日々留意しながら稽古を積みましたが、「良くなった」と言われたのは七年後。するとまた次の課題が持ち上がってきました。完成はないのです。

むしろ、年を重ねるごとに身体は衰えます。ひとつひとつ、努力をするしかないのだなと、つくづく感じますね。

七十を越えて、わたしはいつ竹刀をおくべきかというのを、よく考えます。高野先生は「躊躇がでなくなったらやめる」とおっしゃっていて、七十六歳で勇退されました。

老いとたたかひながら、それを克服して、いつまでやれるか。まさに「山々雲」ですよ。

人間は弱い生きものです。だから苦難があると現実から逃げたくなります。わたしも膝を痛めてから、これ以上膝が悪くなったら困るという甘えが先に立ってしまいがちで、反省の日々です。

それでも稽古がしたい。だから、二時間半もかけて九十九里まで行って、大学生相手に午前午後二度稽古した足で、夜は千葉で稽古、なんてこともできちゃうんですよね（笑）。剣道とは不思議なものですね。

これからも修行の道は続きます。来年一月に米寿（八十八歳）を迎えられる高崎慶男先生のように、立派な生涯剣道をめざしたいと思えます。そして、剣道を続ける上で「相手とどうつながるか」「これをもっと勉強していきたいと思えます。

ご好評いただきました「岩立三郎の明日のあなたと出会いたい」は今回をもちまして終了いたします。ご愛読ありがとうございます。（編集部）